慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日系ブラジル人の自己定義の類型化 : 日本で働く日系ブラジル人に関する社会心理学的考察
Sub Title	"Self-definition" patterns of Japanese-Brazilians : social psychological discussion on Japanese-Brazilians working in Japan
Author	延島, 明恵(Nobushima, Akie)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.39 (1994.) ,p.29- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000039-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日系ブラジル人の自己定義の類型化

——日本で働く日系ブラジル人に関する社会心理学的考察——

"Self-definition" Patterns of Japanese-Brazilians:

—Social Psychological Discussion on Japanese-Brazilians Working in Japan—

延　島　明　恵*

Akie Nobushima

This study deals with the "self-definition" of Japanese-Brazilians working in Japan from a social psychological viewpoint. The results were analyzed utilizing the Social Identity Theory established by Tajfel & Turner (1979). 23 Japanese-Brazilians were interviewed in either Portuguese or Japanese or in both languages, regarding their Japanese language ability, relationships with the Japanese community in Brazil, reasons for coming to Japan, and social identities and the Japanese customs practiced in Brazil. As a result, 3 different "self-definition" patterns were found: "Brazilians", "Brazilians and Japanese" and "Wanderers". Those who regard themselves as "Brazilians" seek the differences between themselves and Japanese, no matter how trivial they are. On the other hand, people who regard themselves as both "Brazilian and Japanese" try to find similarities between Brazilians and Japanese. Also, people in the latter group often manipulate their social identities depending on the circumstances. Finally, those who regard themselves as "Wanderers" have many complaints about Japan and wish to be treated the same as Japanese in Japan.

1. 問　　題

21 世紀が目前に迫った今日，現実の様々な場面での"共生"が問題となっている。環境と人間の共生，異なる民族同士の共生などがその例である。我が日本での外国人労働者と日本人との関係，さらに細かく区分すれば，出稼ぎのため来日している日系ブラジル人と日本人との関係も"共生"の一つの例と捉えることができるだろう。ここでは，そのような日系ブラジル人について社会心理学的視点からの考察を試みる。

1980 年代後半，日本は中小企業を中心に人手不足に見舞われた。さらに，1985 年のプラザ合意が誘因となり，円高ドル安が進行，その結果，日本と周辺諸国との所得格差は拡大し，それらの国々から日本への出稼ぎ労働者流入が増加し続けた。この事態をめぐり，日本国内では，外国人労働者に対する開国派と鎖国派の間で論争が続いていた。だが，以上のような状況は 1990 年 6 月，出入国管理および難民認定法（入管法）改正の施行を契機に一つの転機を迎えた。入管法改正により，日本での資格・活動に関する制限がなくなった日系人が，我が国で単純労働に従事できるようになったからである。折しも，ブラジルでは，進行するハイパー・インフレ，低迷する経済成長など深刻な経済状態が続いていた。その結果，120 万人を超える日系人を有するブラジル（サンパウロ人文科学研究所，1988）からは，一説によると，1992 年一年間で総計 15 万人もの日系ブラジル人が日本に出稼ぎのため滞在している（サンパウロ人文科学研究所，1992）と言われている。

ブラジルにおける日系ブラジル人のアイデンティティやエスニシティについての研究は文化人類学者である前山によって主になされてきた。例えば，前山（1982）は，ブラジルにおける日系人のアイデンティティの歴史的変遷を生活ストラテジーおよび社会上昇ストラテジーとの

* 社会学研究科社会学専攻博士課程（社会心理学）

関連で検討し，8 つのアイデンティティ・モデルを構築した。構築されたアイデンティティ・モデルは，①「移民＝非相続者」モデル，②「移民＝日本人」モデル，③「移民＝客人」モデル，④「二世＝だめになった日本人」モデル，⑤「二世＝媒介者」モデル，⑥「二世＝過渡期」モデル，⑦「移民＝罹災者」モデル，⑧「移民＝養子」モデルの 8 つである。

他方，日本で就労する日系ブラジル人についてなされた調査のほとんどは彼らの物理的状況，すなわち，学歴，家族の来日状況，日本での住居形態や仕事内容を調査したものである。(cf. 雇用開発センター，1991，日本総合研究所，1992)

その中で，宗教学者である渡辺を中心としたグループは，1992 年にブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態調査の一環として，彼らのアイデンティティ変容についての聞い取り調査を行ない，日系ブラジル人のアイデンティティ変容のパターン化を試みている。報告された彼ら日系ブラジル人のアイデンティティ変容のパターンは，①「日本人でもブラジル人でもない」，②「日本人とブラジル人が半分ずつ」，③「日本人とブラジル人を使い分ける」，④「日本人からブラジル人になった」，⑤「よりブラジル人になった」，⑥「より日本人になった」の 6 つである。彼女たちの研究では，日系ブラジル人のアイデンティティ変容過程を他者認識や対外的役割の内在化によって説明を試みているが，解釈についての明確な視点は前面に出されていない。

そこで，筆者は社会心理学的視点より，彼らの日本での自己定義を明らかにすることによって，日本での彼らの現状を模索することを試みることにした。なお，彼らの自己定義については，個人の主観的な観点に立って，集団間関係の説明を試みる社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) を援用した。社会的アイデンティティ理論については，次節において概観する。

2. 社会的アイデンティティ理論

社会的アイデンティティ理論は，Tajfel & Turner (1979) を中心に提唱された理論である。この理論は，集団間関係，とりわけ不平等な権力を持つ集団の関係の全側面を扱うものであり，人々が集団の成員性と集団間の状況を維持・変化させるために個人的・集団的に動機づけられる条件を探ることを試みている。つまり，社会的アイデンティティ，社会的比較，心理的弁別性といった心理的過程に注目することによって，集団間行動を説明しようと試みる理論であり，集団成員の主観的な視点から集団間行動にアプローチするものである。

まず，この理論の基本的な仮説を示す。それらの仮説は以下の①～③の 3 つである。

①人は社会的環境を内集団と外集団に分類する。

②人は肯定的な自己概念を獲得するために奮闘し，内集団の成員としての社会的アイデンティティから自尊心を引き出す。

③人の自己概念は，どのように内集団を外集団との相対的な関係において評価するかに依存している。

また，社会的アイデンティティ理論の 4 つの主要概念は，Tajfel らが中心になって行なったカテゴリー化に関する一連の実験より導き出された。カテゴリー化に関する一連の実験とは，非社会的刺激（刺激として長さの異なる線分を使用）のカテゴリー化に関する実験 (Tajfel & Wilkes, 1963)，社会的刺激（刺激として異なる人種に属する人々の顔写真を使用）のカテゴリー化に関する実験 (Pettigrew *et. al.*, 1958)，1960 年代後半から 1970 年代初めにかけて Tajfel らが行なった最小条件集団の実験（絵の好みなどの些細な基準に基づいて異なる集団に別れた被験者が内集団あるいは外集団に属している二人の他者に対して報酬を分配する）を指すが，実験の詳細についてはここでは省略し，この理論の 4 つの主要概念（社会的カテゴリー化，社会的アイデンティティ，社会的比較，心理的集団弁別性）についてそれぞれ概観する。

まず，社会的カテゴリー化とは，環境に秩序を与え，自己に同一視する焦点を与えるために自分の周りを内集団や外集団などさまざまな集団に分化することを指す。

次に，理論の中心をなす概念である社会的アイデンティティを Tajfel (1978) は，"社会的アイデンティティとは，集団の成員性に結びついた価値や情緒的特性をともなうものであり，社会的集団の成員であるという知識から導き出される個人の自己概念の一部である" と定義している。つまり，社会的アイデンティティは個人の自己概念の一部であり，ある社会的集団の成員であるという個人の知識に由来し，その集団の成員性と結びついた肯定的あるいは否定的な価値を意味する。

第三に，社会的比較であるが，これについて Festinger (1954) は，人は自分の能力や意見の客観的な測定手段を欠くときに，自己評価における不正確さを低減し，正確さを獲得するために社会的比較を行なうとした。しかし，Miller (1977) は，社会的比較には意見や能力以上のものが含まれ，しかも客観的な比較が利用不可能な時に限り社会的比較が行なわれるわけではないと指

摘した。これを受けて，Tajfel らは Festinger の仮説よりも適用範囲の広い社会的比較過程を仮定した。つまり，個人が自分たち自身の集団の相対的地位と価値を理解するに至るのは，社会的比較の過程を通してである (Tajfel, 1978) としたのである。したがって，この理論における社会的比較とは，内集団と外集団の特性を比較する過程であり，人は自分が所属している内集団を外集団よりも好意的に評価することによって自尊心を高めるのである。(Tajfel & Turner, 1979)

この理論の最後の主要概念である心理的集団弁別性とは，個人が願望する状態，すなわち，ある集団の成員が，比較対象となる集団に対して，自分の内集団は弁別的かつ肯定的なアイデンティティを持っていると知覚する状態を指す。

この理論では，人は肯定的な社会的アイデンティティを獲得するために奮闘し，社会的アイデンティティから自尊心を引き出すと仮定されていることは既に述べた。ここではある集団の成員であることが個人に否定的もしくは個人が満足できるほど肯定的でない社会的アイデンティティをもたらす時に，そのような否定的な社会的アイデンティティを相対的に向上させるために個人が採用すると理論の中で指摘されている戦略について述べる。

集団の地位を向上させようという動機には，認知的選択，すなわち，地位の変化可能性と集団間状況の不平等性を知覚することが必要である。認知的選択が知覚されると，優性集団への同化，集団特性の再定義，社会的創造，競争といった戦略がとられる。

優性集団への同化とは，自分の集団が優性な集団に吸収されることにより，肯定的な社会的アイデンティティを獲得する戦略である。この戦略が成功するためには，基本的な文化的・心理的変容が要求される。

二つ目の集団特性の再定義は，以前は否定的に評価されていた集団の特性を再定義し，肯定的に評価し直すことによって，肯定的な社会的アイデンティティを獲得する戦略である。

一方，社会的創造は，集団間の比較や評価に新しい次元を創り出したり，あるいは採用することによって，肯定的な社会的アイデンティティを獲得する戦略を指す。このような新しい次元に基づいて評価することによって，内集団をより肯定的に定義する可能性が高くなるのである。

最後の競争とは，文字通り否定的に評価された集団が，相対的に肯定的に評価されている集団に対して直接挑戦することによって，肯定的な社会的アイデンティティを獲得する戦略である。ただ，この戦略は，優性な集団との直接競争も含んでいるため，集団間の直接的な葛藤を生み出しやすいとされている。

以上見てきた集団の地位向上のための戦略に対して，個人的な地位向上のための戦略は比較的よく採られる。個人的な地位向上のための戦略の一つは，社会的移動と呼ばれるもので，不利な集団から離脱することにより肯定的に評価されている集団に入ろうと試みるものである。社会システムは主観的な構造であるので，個人はかなり自由に移動できる (Tajfel, 1974) が，どうしても内集団からの離脱が不可能な場合には，集団内比較，すなわち，自分の集団内の他者と自分自身を比較するという戦略を個人は選択する (Smith, 1985)。この集団内比較という戦略は，個人にあまり好ましくない評価をもたらすことが少ないことが指摘されている。

最後に，社会的アイデンティティ理論で考えられている外集団の役割について触れる。Tajfel ら (1974, 1979) は，外集団との単なる接触は，内集団に対する愛着を高めると指摘している。つまり，外集団は社会的アイデンティティに対して重要な役割を果たしていると言える。また，Wilder (1981) によれば，外集団の存在が明確になると，内集団の類似性は実際よりも大きく知覚されるようになるという。

3. 調査研究

本調査研究は，以下の要領に従って 1993 年 9 月末から 1993 年 11 月末にかけて行なった。

調査対象：日本へ出稼ぎに来ている日系ブラジル人23名(男性 16 名，女性 7 名)。平均年齢 37 歳，世代は二世 18 名 (二重国籍者 2 名を含む)，三世 5 名であった。なお，人種的条件を同一にするため，日本人の祖先しか持たない者を対象とした。

調査方法：面接法。東京上野にある日系人雇用センターや関東周辺の日本語学校にやって来る日系ブラジル人を紹介してもらうなどして，調査対象となる日系ブラジル人に調査者である筆者が直接調査への協力を依頼した。調査対象者の要望により，ポルトガル語あるいは日本語，場合によっては両言語を使用して，面接調査を実施した。面接方法は後述する質問項目をあらかじめ定めておき，自由に被調査者に語ってもらうという形式を採用した。面接内容は，被調査者の許可を得た上で，テー

プ・レコーダーに録音し，後に書き起こすことができるよう配慮した。また，被調査者の外見的特徴や話し方なども面接時に書き残しておいた。

質問項目：①人口学的要因（性別，年齢，国籍，ブラジルの出身地，来日時期）
②日本人度（日本語能力，家庭内での日本語使用頻度，ブラジルで和食を食べる頻度，世代）
③日系人度（ブラジルでの日系社会とのつながり。例えば，居住地，日本語学校への通学経験，会館での催し物への参加頻度，野球・卓球などへの参加頻度など）
④来日目的・動機
⑤日本での環境（家族の有無，ブラジル料理を食べる頻度，ブラジルに関するニュースの入手の有無と入手手段）
⑥自己定義（自分は何人であるか，ブラジルでの日系人の扱われ方，日本での日系人の扱われ方，他の日系人と間違われた時の対処の仕方，ブラジルか日本のどちらかを選択しなければならない状況時での対処の仕方）

分析方法：自己定義に関する発話内容の類似性により，いくつかの類型の析出を試みた。それぞれの類型に関して社会的アイデンティティ理論より解釈を試み，同時に各類型の特徴を探った。さらに，それぞれの類型に共通する環境的要因（人口学的要因，日系人度など）の検討を試みた。

4. 結果と考察

発話内容に基づいて日本における日系ブラジル人の自己定義の類型化を試みた結果，大きく3つの類型を析出することができた。すなわち，「日系人＝ブラジル人」「日系人＝ブラジル人＋日本人」「日系人＝さまよい人」の3つの類型が導き出された。本節では，それぞれの類型について社会的アイデンティティ理論に基づく解釈と特徴の記述を行なう。

4-1. 日系人＝ブラジル人

9名の被調査者がこの類型に分類された。この類型に属する人たちの日本人度や日系人度には共通した特性は認められず，日本人度・日系人度ともに低い人たち（7名）と日本人度・日系人度ともに非常に高い人たち（2名）の二つのグループが存在する。

彼らは自らのことを“ブラジル人”と称している。社会的アイデンティティ理論によって解釈すると，彼らは日本人と接触した結果，日本人と自己との差異を大きく知覚するようになったと言える。特に，ブラジルにおいて日系人集団と物理的に接触する機会がなかった者は，来日によって，外集団“日本人”や日系ペルー人などと自分たちの社会的比較が容易になったため，ブラジル人としての心理的弁別性を一層明白にしたと考えられる。特に，日本において同じような境遇にある日系ペルー人（ブラジルに次いでペルーからの入国者数は中南米で第二位である）との社会的比較に関しては，日系ペルー人を否定的に評価し，自分たちを肯定的に評価するという内集団偏愛が認められた。日本で日系ペルー人と一緒に働いた経験を持つ男性（二世 38 歳）は，彼らに対して次のような否定的な見解を示している。

“……日本ではブラジル人は〔中略〕ペルー人のことも好きじゃない。〔中略〕生活の仕方が全然違うんだよ。〔中略〕ペルー人は人の物を盗ったりね。〔中略〕すごく怠け者なんだ。〔中略〕ペルーのならず者たちが日本に来てるんだ。〔中略〕ペルー人が二人一緒に働いていたけど，仕事が下手だったね。”

さらに，日系コロニア出身者である日本人度の高い人たちは，社会的創造という戦略を採ることによって，ブラジル人と自己との類似点を見いだしているようである。つまり，“ブラジルで生まれた“，“（スポーツの試合の時は）いつもブラジル・チームを応援する”といった特性を新しい比較次元として採用しているのである。それと同時に，日本人との些細な違い（例えば，“日本人は便所と言わずにトイレと言う”など）を日本人と日系人の違いとして知覚するようになったのではないか。この点に関して，筆者は，社会的アイデンティティ理論に反するが，次のように解釈してみた。たとえ日系社会の中心人物であり，“日本人”の特性をたくさん備えているとしても，その個人は“日本人”の集団成員としての資格を持っていない限り，日本人に同一視することは難しいのではないか。換言すれば，明確な集団成員の資格が欠如した状態では，人はその集団に同一視することが難しいと考えられるのではないか。

この類型に属する人たちのその他の特徴は，ブラジルについての言及頻度が他の類型の人たちと比較して多少多いこと，積極的にブラジルの話をすること，ブラジルで流行している服装を身につけていることである。おそらく，ブラジル人としての心理的弁別性を達成するため

に，日本人との視覚的差異化を試みているのだろう。また，日系社会とつながりを持っていなかった者は，日系社会や一世に対して否定的な意見を述べる傾向にあった。例えば，日系三世の女性（34 歳）は日系社会について次のような見解を示している。

"日系社会は日本の社会もそうだけど，閉鎖的で伝統を保持しているから外から入れない〔中略〕だからむこうでは日系人の友達はいませんでした。"

なお，「日系人＝ブラジル人」が行なった日本に対する肯定的な評価には，「経済が安定している」「親切」「ブラジルに興味を示してくれる」「規則正しい」がある。一方，「差別される」「不親切」「ブラジルについて無知である」「行儀が悪い（仕事中，"バカヤロー"と怒鳴られた）」「高い物価」などが，彼らの指摘した日本の悪い点である。しかし，この類型の人たちの日本社会に対する評価は，他の類型の人たちと比較して，面接調査の中ではあまり見受けられなかった。

4-2. 日系人＝ブラジル人＋日本人

この類型に分類された人たちは 10 名に上る。彼らの大部分は，ある程度日本人度を備えており，しかもブラジルにおいて日系人とのつながりを持っていた人たちである。彼らは自らのことを"ブラジル人でもあり日本人でもある"と称している。

社会的アイデンティティ理論によって解釈すると，彼らは家庭内の環境が日本的であるため，日本人と同一視しやすい環境にあるが，完全に日本人に同一視しているわけではない。彼らは社会的比較という手段により，ブラジル人と日本人という複数集団成員性を自分の置かれた状況に応じて操作しているのである。また，自己と日本人もしくは自己とブラジル人との社会的比較においては，差異ではなく類似点を見い出すことによって，肯定的な社会的アイデンティティを達成しようとしている。そして，ブラジルにおいて，より"ブラジル人"であることを願望する際には，集団内比較，すなわちブラジル人と自己との比較を行なったり，ブラジル人集団への同一視を強化したりする。例えば，"ブラジル人"との集団内比較によって，日系人に限らず，"真のブラジル人は存在しない。"と結論づけることにより，この類型の人たちはブラジル人に同一視している。また，サンパウロ州で花屋を営む男性（二世 29 歳）は，日系人以外のブラジル人と接する時には，以下に示すようなブラジル人の行動様式で接することにより，ブラジル人への同一視を強化している。

"……お父さんが僕に任せてた花畑では，半分は日本人の厳しいやり方でやって，あと半分はブラジル人のやり方をしないとね。100% 日本人のやり方でやったら，誰も仕事してくれないもん。〔中略〕日本人の考えとブラジル人の考えを併せてやらないと，〔中略〕ちょっとやさしくしないとだれも来てくれないよ。"

逆に，日本において，より"日本人"であることを願望する際には，日本人への同化や日本人の特性を獲得するといった社会的移動をこの類型の人たちは試みている。日本人への同化を試みる女性（二世 27 歳）は，非常に流暢な日本語を話し，ブラジル料理よりも日本料理を好むそうだが，次のように述べている。

"……日本にいるんだったら，日本に慣れるのが一番ですから，なるべく目立たなくて，外国人って思われないようにするのがいいのかな。"

また，日本において日本人の特性を獲得することにより社会的移動を試みる男性（二世 29 歳）は次のような発言をしている。

"……日本は会社の景気が悪い時には，みんな一生懸命仕事をして〔中略〕あっちは会社が悪くなったら〔中略〕さっさと行ってしまうよ。こっちは〔中略〕我慢して会社を建て直すもんね。僕はうちの会社で"日本人"の考えでやってるよ。"日本人"のこと覚えたもん。〔中略〕朝もいつも 1 時間早く行くよ。"

この他のこの類型に属する人たちの特徴は以下に述べる通りである。まず，日本に対して否定的な評価よりも肯定的な評価を頻繁に行なうことである。日本に対する肯定的な評価として，「親切」「経済が安定している」「よく教育されている」「食物がおいしい」「ブラジルに興味を示してくれる」「組織のために尽くす」「規則正しい」「信頼できる」「高度な技術力」が指摘された。

この類型の特徴の第二は，人種的に日本人だからということではなく，自分が育った環境が日本的であるため日本的な特性を身につけていることを認める発言をよく行なうことである。第三は，日本の食事に不満を示さず場合によっては満足感を覚えていること，第四は，日本で日本人と知合う機会に恵まれていること，そして第五は，日本的な服装を身につけていることである。この最後の特徴は，「日系人＝ブラジル人」とは対称的な特徴であり，非常に興味深いが，おそらく「日系人＝ブラジル人＋日本人」は，日本では"日本人"との類似性を大きくしようと試みているからだと考えられる。

4-3. 日系人＝さまよい人

この類型に分類された人たちは 4 名である。彼らは，

ブラジルでは日本人とみなされるが，ブラジル人として扱われることを望み，日本ではブラジル人とみなされるが，日本人として扱われることを望んでいる。彼らは口をそろえて，「日本では日本人として扱われていない。」と述べている。

この類型の人たちを社会的アイデンティティ理論によって解釈してみる。彼らは，少なくとも来日時に同一視していた“日本人”集団から集団の成員として認めてもらえなかったため，日本人との接触により，否定的な社会的アイデンティティを獲得するに至った。その結果，彼らの自尊心やセルフ＝イメージは低下したと考えられる。そこで，彼らは低下した自尊心やセルフ＝イメージを向上させるために，いくつかの戦略を採用した。それらの戦略は，来日している日系ブラジル人との集団内比較により自己の優越性を確認したり，日本人集団への同一視を否定するといった戦略である。

例えば，ある男性（二世 30 歳）は，日本で働いている他の日系ブラジル人は日本の文化を学ぼうとしていないが，自分は歌舞伎を鑑賞したり，日本語の勉強をしたりして日本文化に敬意を表しているといった集団内比較を行なうことによって，自己の集団内における優越性を主張している。

上述のある集団への同一視を否定するという戦略は，社会的アイデンティティ理論に提示されているものではなく筆者の解釈によるものである。これは，同一視することによって否定的な社会的アイデンティティを獲得することになった集団への同一視を否定するという戦略である。「日系人＝さまよい人」の人たちに関して言えば，彼らは“日本人”を否定的に評価することが多く，相対的に日本人集団の魅力を低下させ，日本人への同一視停止を正当化するよう試みているようであった。つまり，“日本人”集団を場合によってはブラジル人との比較によって否定的に評価し，“日本人”集団の魅力を小さくする。そしてもう一つ別の社会的アイデンティティである“ブラジル人”の相対的魅力を高め，“ブラジル人”の肯定的な社会的アイデンティティを達成しようとしているのではないか。例えば，ブラジル人は非常に友好的であるが，日本人は閉鎖的であるといった社会的比較を行なうのである。

この類型の人たちのその他の特徴は，中級程度の日本語会話能力（自分の意志を相手になんとか伝えられる，相手の言っていることがだいたい分かる）を有し，大学中退以上の学歴を持っていること，日本や日本人に対して非常に否定的な見解を持っていること，日本人の子孫であるという意識が非常に強いこと，来日した理由として「日本（外国）を知るため」を挙げていることである。

「日本（外国）を知るため」という来日理由は，つまり，日本において“日本人”の中で生活し，日本人の友達を作り，日本の言葉や文化などを習得するという目的を持っているということである。だが，現実の日本での生活は，ブラジル人の中だけで働き，ブラジル人のみの会社の寮で生活するという毎日を過ごす者が大半を占めている。したがって，目的達成を阻止されている現在の状態が，日本人に対して否定的な意見を持つ要因の一つとなっているのではないか。

5. おわりに

調査研究より日本で働く日系ブラジル人の自己定義は，「日系人＝ブラジル人」「日系人＝ブラジル人＋日本人」「日系人＝さまよい人」の大きく3つの類型に分類できることが明らかになった。このことから彼ら日系ブラジル人を一概に“日本人である”あるいは“ブラジル人である”とみなすことはできないと言える。それは客観的にも主観的にも言えることである。客観的な特性，すなわち日本人的な側面（言語，食事などの習慣）の保持という点について，彼らの間には非常に大きな個人差が認められる。つまり，日系ブラジル人の中には，日系社会の中心的役割を果たしている非常に日本的な人もいれば，日系社会とのつながりを全く持たず，日本語を全く解さない人もいるのである。また，主観的な側面については自己定義の分析の結果，個人の持つ客観的な特性にかかわらず“ブラジル人”であることを望む者もいれば，日本においては“日本人”であることを望んでいる者もいるからである。さらに，本研究の「さまよい人」と呼ばれる，ブラジル人にも日本人にも同一視することのできない日系ブラジル人の存在は大きな問題であろう。彼らは日本に対して否定的な見解を示すことが多く，非常に大きな不満を日本に対して抱いているからである。

人手不足の解消策として，日本人の血を継承している日系人の単純労働従事を安易に奨励することは慎むべきではないか。日系ブラジル人を初め，日系人が我々日本人と共有している習慣や仕事に対する態度は，日系人以外の外国人と比較すると多いかもしれない。だが，彼ら日系人を日系人として尊重していく姿勢が，彼らとの“共生”を進めていく上で私たちに求められているのではないか。つまり，「日系人＝外人」あるいは「日系人＝日本人」という二者択一的な視点ではなく，日系人を多

様な可能性を秘めた人々として捉えるよう努めることはできないだろうか。そのことは結果として，日系人が「日本人」である自分と「外国人」である自分の双方を肯定的な自分のアイデンティティの一部として保持することを可能とするのではないか。

今後の研究の展望としては，大別して二つの課題を挙げることができる。まず第一に，本研究で明らかにできなかった日系ブラジル人の自己定義の詳細を明確にすること，すなわち彼らの自己定義についての社会的カテゴリー化の変容過程を明らかにし，さらにその要因を探ることである。それによって，より広範囲にわたる人間の社会的アイデンティティとその機能を明白にすることができると思う。

第二の研究課題は，今回の調査研究で結果の解釈に援用した社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) の精緻化を試みることである。本研究の結果の中には社会的アイデンティティ理論に提示されているものとは一致しないものがいくつか見受けられた。それらの点を今後，実証研究により明白にしていくことが必要であろう。それによって，社会的アイデンティティ理論の現実場面での有効性を高めることができるのではないかと考えるからである。

参考文献

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. Human Relations, 7, 117-140.

藤崎康夫 1991 シリーズ外国人労働者①出稼ぎ日系外国人労働者 明石書店.

古田島秀輔 1993 ブラジルの政治・経済の底流 ラテン・アメリカ時報, 1993 年 7 月号, 2-14.

法務大臣官房司法法制調査部(編) 1993 第 32 出入国管理統計年報 平成 5 年版.

法務省 1991 平成 3 年版 在留外国人統計.

前山 隆 1982 ブラジルの日系人におけるアイデンティティの変遷—特にストラテジーとの関連において 筑波大学ラテンアメリカ研究, 181-217.

毎日新聞東京本社社会部(編) 1990 じぱんぐ—日本を目指す外国人労働者— 毎日新聞社.

Miller, R. L. 1977 Preferences for social vs. non-social comparison as a means of self-evaluation. Journal of Personality, 45, 458-468.

向 壽一 1991 累積債務の新たな局面 世界, 1991年 7 月号, 91-103.

村角 泰 1993 最近のブラジルの政治経済情勢について ラテン・アメリカ時報, 1993年10月号, 3-13.

日本銀行調査統計局 1992 外国経済統計年報 1991 年版.

NHK 取材班 1991 NHK スペシャル—人不足社会 誰が日本を支えるのか— 日本放送出版協会

Pettigrew, T. F., Allport, G. W., & Barnett, E. O. 1958 Binocular resolution and perception of race in South Africa. British Journal of Psychology, 49, 265-278.

労働省(編) 1992 労働白書 平成 4 年版 日本労働研究機構.

労働省(編) 1993 労働白書 平成 5 年版 日本労働研究機構.

サンパウロ人文科学研究所(編) ブラジルにおける日系人口調査報告書—1987・1988—

サンパウロ人文科学研究所(編) 1992 ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会での対応 —送出国ブラジルと受け入れ国日本の共同研究をとおして— ブラジル側報告書

Smith, P. 1985 Language, the sexes and society. Oxford: Basil Blackwell.

Tajfel, H. & Wilkes, A. L. 1963 Classification and quantitative judgement. British Journal of Psychology, 54, 101-113.

Tajfel, H., Flament, C., Billig, M. G., & Bundy, R. F. 1971 Social categorization and intergroup behavior. European Journal of Social Psychology, 1, 149-177.

Tajfel, H. & Billig, M. 1974 Familiarity and categorization in intergroup behavior. Journal of Experimental Social Psychology, 10, 149-178.

Tajfel, H. 1978 Social categorization, social identity and social comparison. In H. Tajfel (ed.), Differentiation between social groups. London and New York: Academic Press, 61-76.

Tajfel, H. & Turner, J. C. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (eds.), The social psychology of intergroup relations. Monterey, Cal.: Brooks/Cole, 33-47.

Taylor, D. M. & Moghaddam, F. M. 1987 Theories of intergroup relations. Praeger Publishers.

Turner, J. C. & Giles, H. 1981 Intergroup behavior. Oxford: Basil Blackwell.

渡辺雅子・光山静枝 1992 ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応 明治学院論, 499.

渡辺・弓削・石川・渡辺・穴田・石井 1992 日系出稼ぎ労働者の急増に伴う日本社会の対応と模索 明治学院大学社会学部付属研究所年報第 22 号, 55-85.

Wilder, D. A. 1981 Perceiving persons as a group: Categorization and intergroup relations. In D. L. Hamilton (ed.), Cognitive processes in stereotyping and intergroup behavior. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates, 213-257.

財団法人雇用開発センター 1991 外国人労働者問題資料集.

財団法人日本総合研究所 1992 外国人労働者受け入れに伴う社会的コストに関する調査報告書.

注）本文は筆者の『日系ブラジル人についての一考察
—人手不足社会日本へ還流してきた日系ブラジル人の意識調査—』(1993 年度慶應義塾大学大学院修士論文）の一部をまとめたものである。